
ありえたかもしれない未来

メタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありえたかもしれない未来

【Nコード】

N3741T

【作者名】

メタル

【あらすじ】

それは、ありえたかも知れない一つの未来の結果。

もし、時空管理局が地球へと介入を決めてしまったら？ それによつて少なくとも無い犠牲が生まれてしまったら？ その時、なのはやはやて、フェイト達はどういった選択を取ったのだろうか。

これは、時空管理局と、時空管理局へと反旗を翻した者達が起こした一つの戦いの物語……

砂塵が舞う戦場の中に幾つも設置された仮設テント。

阿鼻叫喚の地獄絵図とも称すべき其処は、紛れも無い戦場。

一つのテントには、戦場で散って逝った、肉体が遺った遺体が収容されている。

一つのテントには、怪我を負い治療を行われている者達が多く収容されている。

一つのテントには、指揮官たちが総勢で十数人、皆々が険しい表情で並んでいた。

何れもが、数多くの血腥い戦場を超えて来た歴戦の戦士であり、魔導師だった。

同時に全ての者達が、時空管理局によって故郷の世界を管理世界に変えられた、或いは、管理外世界出身の者達。

中には、魔導師としての才覚では無い、その単純な指揮能力や戦闘力で入局した者もいる。

「戦線は、どうだ？」

一人の屈強な身体を持つ壮年の男性が手を組み、肘を突きながら声を出した。

対峙する側に座る、まだ少女という色が抜けきっていない茶色の髪を持つ女性が淡々と読み上げる。

「現在は持っています。高町少佐が一時戦線を離脱している以上、グレイフ准将と風見大尉が維持を続けています」

「高町少佐の戦線復帰は？」

「早く見ても三〇。遅く見れば一〇〇。掛かるかと」

「では、高町少佐の代わりに、オードヴィル少佐を向かわせてくれ」

「了解しました」

女性将校は後ろに控えていた桃色の髪を持つ女性に指示をし、彼女を退席させた。

「厄介なのは、矢張り『金色の死神』ハラオウン執務官とその一派かのお……」

「左様。だがそれを全て見込んだ上で、我等は戦いを挑んだのだ。大義と正義ばかりを掲げ、人を見ぬ管理局に」

「元々、勝利の糸などは蜘蛛の糸ほど薄い筈です。全員、それを覚悟で此処に居る筈」

「厳しいのお、ミッドウエー中将は」

冷然とした女性将校の言葉に、老練な将校はミッドウエーと呼ばれた女性将校と、もう一人の女性将校に眼を向ける。

「しかし、後悔は無いのかの。八神准将。あちらさん側にはお前さんの友人が多くいる筈じゃ。行くなら今じゃぞ？」

「冗談はやめてください、ブラウン大将。……もう、局の暴走は見るに堪えかねませんよ、私だって」

「多くの者が妻や愛する者と敵対の道を選んでも、この悪道を進むと決めたのじゃ。この場に居る者は、今更言葉で揺らぎはせんよ」

この仮設テント内部こそ、前線に招聘された将校達が集う場所であつた。

——新暦83年、度重なる時空管理局による魔導師至上主義が齎す弊害によつて、一つの陸士部隊、及び本局の艦艇が全滅する事件が起きた。しかし、管理局上層部はその件を振りかえりもせず、ただ人材不足と称し多くの世界にその手を伸ばして行つた。

其れは当然、今や三提督に並ぶ伝説と称されるほどにもなつた、高町なのはや八神はやて等を輩出した地球も例外ではなかつた。融和ですらない、ある種の脅迫文と共に各国首脳陣に通達された管理世界入りの申請。

当然、未知の技術体系、政治体系、加えて多くの世界を管理すると言つ傲慢さに数多くの国々が反発し、結果、地上は焼けた大地に変わった。

切つ掛けはそれなのであろう。

だが、火種は充分に蓄えられていた。

故に爆発をしたのだ。クーデターと言う形を以つて。

ラルゴ・キール名誉元帥を筆頭に、凡そ九十名による将校達の手によつてそれは起きた。

中枢とも呼べる数多くの将校たちが起こしたクーデターによつて時空管理局は二分した。

旧体制を支持する者達と、新たな、三権分立たる司法、立法、行政によつて時空管理局は解体、再構築を目指すクーデター派。

当初こそ、数百名前後であつたクーデター派は、二ヶ月を過ぎた頃には二万人規模にまで膨れ上がつていた。

その多くは、管理外世界出身の者達。或いは、魔導師至上主義によつてあるべき立場に到る事が出来なかつた有能な軍人達。

現在前線に集つた将校達は総勢で十五名。

ブラウン大将、カーバニック中将、ミッドウェー中将、バーブル

中将、レビル中将。

九頭桐少将、ラービン少将、八神はやて准将、グレイフ准将、マ
ービル准将。

クロムエル大佐、バージット中佐、オードヴィル少佐、シグナム
中佐、高町なのは少佐。

内、五名ほどは戦線へと行っているか、或いは後退をしている。

「愚問、であつたか。ならば宜しい。三次防衛戦線の状況。進展
はどうじゃ」

「ハッ、レビル中将率いる部隊が戦闘機人を中心とした部隊と交
戦中の様です」

「恐らくは、スバル・ナカジマ等かと思われます」

「本局の馬鹿共めが。災害担当の人間を奪う側に配置するとは…

…」

八神准将の言葉に、ブラウン大將が忌々しささえ込めて毒を吐く。

「今回の戦闘は、飽く迄ウルダ基地の機能を停止させればそれで
良い。戦闘機人部隊には損害は出さんように」

「何故です？」

「アレ等の結束は傍から見ても固い。一人が欠ければ、それだけ
で奴等の戦意は高揚する。戦局がどの様に変化するかは知れんが、
被害が増えると言う事だけは確か。ならば適当にあしらい、足止め
しておけば良い。存外に奴等は直情的で操り易い。ハーミッド先行
隊は既に基地内部に侵入を果たしておるんじやろう？」

「はい。既に所定の位置に爆薬を設置し終えたとの事です」

「ならばこのまま爆破完了までレビル中将の部隊に前線を維持す
るように通達。儼等は作戦完了までこの最終防衛ラインを守護し、
指示する」

了解、という総和が響く。
遠く離れた前線では未だに魔力光が禍々しく輝き、轟音が響いていた。

「ぬおおおおっ！！」
「あああああっ！！」

低く、一切の恐怖さえも感じない勇ましさに満ちた男の声と少女の声が木霊する。

激突する二つの拳。

一方はただ手に原始的な装甲を付けただけ。一方は強大な魔力を纏った拳。

「若く、澄んだ拳は見事！　だが、それでは僕は斃せんぞ、小娘！」

「ッ……なんでっ、なんでこんな事を！」

「そうさせたのは、管理局自身！　その事を理解していない貴様には言われたくは無い台詞だ！」

それは、ある意味では魔導師達の心を折るには相応しい光景だった。

Aランクに匹敵する近接魔導師と真っ向からぶつかり合って圧倒しているのが、魔導師としての才能が全くない、既に五十を過ぎた初老の人間であると言う事が。

「カァッ！」

「うわあっ!?!」

拳圧。裂帛の咆哮によって青髪の少女——スバル・ナカジマの身体が吹き飛ぶ。

「スバル!」

「つの野郎!」

その彼女の身体を受け止めるのは、姉であるギンガ・ナカジマ。怒りと共に走り抜けて呐喊するのは妹のノーヴェ・ナカジマ。

「らあっ!」

「ぬんっ!」

戦闘の為に生み出された戦闘機人。

その矜持さえも押し潰すかのような現実。

只の拳が、魔力を帯び、その気になれば人体を吹き飛ばす事さえ可能な程の威力を持つ拳が、押し負ける。

「尤も、儂が何かを言える様な立場ではないがな。——如何な理由があるうと、儂等は武器を取り、戦いの道を選んだ」

「くっ!」

「それは忌むべき行為だ。大義や信念など、戦争の惨めさの前には霞んでしまう。正しさなど何処にも無いだろう」

「それが分かっていながらテメエ等は何やってんだよ!」

「だが、それでも誰かがやらねばならん! 例え後世に悪名を語り継がれようと……これ以上、管理局の暴走を看過する訳にはいかんだ! その一端を担っていた者として!」

拳の先の鉄甲が僅かに削れ始めながらも、尚、ヨハン・イブラヒ

ム・レビル中将は止まらない。
寧ろ、その歩みはより鈍重且つ不動のものに。

「シューティングアーツ。それはより大衆の為に特化した戦闘技術であり、同時にスポーツとしての側面も高い。人を導く道…それは武道と言っのだろう」

「何が言いてえんだっ！」

「……………本物の、人を傷付け、殺める為に特化した武術とはそもそも存在する理由が違う」

踏み込んだ足が沈んだ。

余りにも苛烈に掛けられた重量に地面が耐え切れず、レビル中将の足元に罅が走る。

「否定はせん！　だが、よりそれに特化した故に、儂には届かん！」

「っ…………ざけんなっ！！」

だがノーヴエとて敗ける気は無い。

彼女の背中には守らなければならない家族が、友達が、仲間がいる。

どれだけ普段、つれない態度や不遜で生意気な態度を取ろうと、彼女の人を思う気持ちはスバルにも勝るとも劣らない。

此処まで仲間を、少なくとも彼女からすれば身勝手な、今ある平和を台無しするという行為で傷付けられ、素直に諦める事は出来ない。

「だが導くからこそ、絶つ事しか出来ぬ儂とは違い…君達は次代を担う想いも力もある。だから…………君達は、今は倒れる。儂等の独善の為に」

「がつ…！？」
「ノーヴェ！」

懐に入られ、スバルと同様に意識を刈り取られるノーヴェ。
当然の様にその身体が誰かに受け止められる事は無く、前面から
地面へと崩れ落ちる彼女の背を見て、ギンガが悲痛に叫んだ。

「さて、君は先の二人よりも冷静な判断が出来そうだ。だからこ
そ言おう。撤退しなさい」

「……貴方の指示に従う理由はありません！」
「そうか。——残念だ」

それは心からの言葉。
レビル自身にとつては、此処で彼女達の命を刈り取るつもりは無
い。

先程も言ったように、彼女達はこれからの時代を担って行く存在。
次代を生きる者。

全ての負の遺産を自分達が背負い、彼女達にはこれから羽搏く翼
の一翼となつて貰わねばならない。

彼女達の姉妹もまた同じ。

そして、レビルの言葉の直後、数キロ離れた先。

時空管理局ウルダ防衛基地の到る所で大規模な爆発が発生。

瞬く間に広がる火災旋風の嵐は瞬時に、その場に居た局員や将校
達の命を焼き尽くして行く。

稲光にも似た、極大の閃光が一瞬だけ、戦場を呑み込み、次いで
鳴り響く轟音の連鎖。

「なつ、なに…！？」

「……ふむ、作戦は成功、と言う事か」

「さく、せん……？」

方角からしてそれは彼女達が一時的に防衛を任された基地から発生した光と音。

思わず嫌な予感が背筋を走り抜けて、呆然とギンガが眩き、レビルは淡々と自分達の作戦が成功した事を実感する。

そんなレビルの言葉に、ギンガはただ信じられない様な眼差しでレビルを見た。

「なに。作戦と言うほどのものでも無いかもしれないが…単純な話、儂等とは違う別動隊が基地に侵入し時限式の爆弾を設置。そしてそれが、今し方爆発したというだけの単純明快な話だ」

「爆弾!？」

「此度の戦場、儂等の勝ちだ。既に帰るべき場所を無くした君達は本来ならば捕虜として鹵獲するべきだが…」

身構えるギンガに対し、レビルは身を翻し、その背中を無防備に見せて歩き去って行く。

「見逃そう。まだ局の中にも、種は必要だ」

「ま、待ちなさい! まだ戦いは…!」

「終わっているよ。……生き残りを掻き集めて、さっさと戻りなさい」

それはせめてもの情、とでも言うのだろうか。

元管理局員——陸士として、地上本部の人間だった者として、嘗て部下であつた少女に対しての。

勿論、其処には利害の一致や、今後の事を鑑みての思索がある。

けれども、本の僅か…砂礫程度に残った良心を使って、レビルは目の前の少女に傷を負わせる事を止めた。

——新暦83年3月4日。

時空管理局、第一管理世界ミッドチルダ。ブルッセウム地方ウルダ地区防衛基地。

管理局よりクーデターを起こした部隊の手により、陥落。

防衛基地は、設置された高性能爆弾の起爆により全壊。

死者千と五十八。負傷者、三千九百余名。内、本局将校は全員殉死。

その中で、魔導師としてのランクがAランク以上のものは十名。内、Sランクオーバーが二名。

この瞬間、再び管理内世界に質量兵器の危険性が浸透する半面、余りにも肥大化し過ぎた魔導師至上主義を容易く覆す質量兵器の有用性が世論で実しやかに拡散していく。

一部メディア媒体では、魔法も質量兵器も同じだと言う意見すら出た。結局は、使う者の手によって全にも悪にも変わる、と。

それは時空管理局にとって最も忌避するべき事態。

魔法を至高の物とし、自分達を脅かす質量兵器：魔導師としての資質に関係なく、己を貶めかねないそれに対して肯定的な意見が出てしまうという現実。

時空管理局は、より正確に言うならば、一部の高ランク魔導師達は戦果によって生じた犠牲に鎮魂を奉げるよりも、己の立場が危ういものになるかもしれないという現実に憂いを懷いた。

その思考そのものが、そもそもこの戦いを——戦争を招いたのだとは理解もせずに。

コンコン、と彼女の病室の扉が控え目にノックされた。
既に意識が回復していた彼女はその音に対して反応を返す。

「どうぞ」

「失礼する。高町少佐。——今は大丈夫か？」

「マグナス少佐…はい、大丈夫です」

そう言つて微笑んだ高町なのはは、自分のベッドの脇で寝こけている二人の少女の頭を撫でながら言った。

彼女達を起こさない様に、オードヴィル・マグナスも静かに室内へと入る。

彼の身体は大きい。鼠色にくすんだ灰色の短く切り揃えられた髪に目を走る刀傷。そのどれをとつても、彼は強面。

子供が見たら泣きだしかねない容姿であり、更には彼の声自身も低い為、普通に喋っていても怯えられる。

その為、彼は非常に子供の扱いに対しては敏感であった。

まあ、そんな事を気にするほど、今眠っている二人の少女は肝が小さくは無いのだが。

「……お前が戦線を離脱した後、『金色の死神』…いや、ハラオウン執務官と交戦した」

「！…そう、ですか」

「まあ、こうして生き残れたから重畳だが…アレは、不味いぞ」

不味い、というその言葉の意味を、なのはは正しく理解した。

誰の、何を指しているのか。

こうして袂を分かつて、明確な敵と言う立場で再び彼女と対峙をして、漸くなのはは親友だった彼女の異常性を理解した。

尤も、その事を伝えるよりも早く身体に限界が来て戦線離脱をし

てしまったのだが。

「覚悟が無い。…戦争つてもんを理解せず、感情の儘に動いている。…お前さん、戦ってる時に何て言われた？」

「…「なのは騙されているんだよ、こんなの…こんな事をしちやダメだ。もつと他の方法がある」って」

苦笑、それを漏らして紡がれたなのは…いや、正確にはフェイト・T・ハラオウンの言葉に、オードヴィルは顔を顰めた。

「確か、アレにとつても『地球』は故郷じゃないのか？ 確か、

義兄の嫁と子供等も現地には居た筈だが？」

「フェイトちゃんは、優しいですから…」

「フォローになつて無いと自覚しているか？ しかもそれは現実逃避だ。生き伸びてはいるが、監視下だろう。どうせ」

なのは自身にもわかっている。

自分達の取った道は、選んだ道は決して正しくは無いと。

間違い、そう呼ばれても仕方がないかもしれないし、他の方法もあるかもしれない。

けれど、けれども…大切な故郷を、自然を、命を奪われてただ黙々と理由があつたのだから仕方がないと言われ、唯々諾々と従い続ける事なんて出来ない。

フェイトは知らないだろうが、なのはとはやては知っている。

彼女達の同級生の一人。その一人の伴侶が、先の時空管理局による攻撃によって命を失った。そして、その彼女も後を追う様に自殺した。

それだけじゃない。同級生の中には傷を負つて、二度と自分の足で立ち上がれない人もいた。

それが切っ掛け、と言う訳じゃない。あの地獄の様な光景を見て、

時空管理局という組織に懐いていた意識が変革してしまった。

「まあ、俺が聞きたいのは……戦えるのか、アレと」

「戦いますよ。——自分で選んだ道です。其処で嫌な事があるから戦わない、なんて……子供みたいな事は言いません」

「そうか。それならまあ、今はゆつくり休め。傷をキチンと癒すのも仕事だ」

「は、はい」

見事な自分のオーバーワーキングを皮肉られて冷や汗を流すなのはにオードヴィルは快活に笑いながら立ち上がる。

「それと、スクライア殿も後で此方に来る。余程の事が無い限り邪魔が入る事はないだろうが……まだやるなよ」

「ちよっ！？ なに言ってるんですか！！ セクハラですよ！」

「ハッハッハッ」

顔を真っ赤にして怒鳴り付けるなのはの声に笑い声を背中から返し、思わず彼女が枕を投げた頃には、既にその背中中は扉によって閉ざされていた。

「ぜー、ぜー……あ、あの人のセクハラ、絶対訴えてやる……なの」

変な語尾が出たけど気にしない。気にしたら此処ではやってはいけない。

何だか非常に緊張感が崩れてしまった気がして仕方が無いけれどこの際それは無視する。

「んにゅー……なのはママあ……むにいー……えへへ、柔らかい

……このおまんじゅう……」

「ヴィヴィオさん……そんな所、触ってはいけません……ああ……」

娘とその友人の寝言もこの際無視する。

と言うか、聞かなかった事にする。

明橙色の長髪を歩く度に揺らしながら、凜然と通路を歩む女性がいた。

蒼い双眸に揺らぐ事無き意志を宿した彼女はその歩みに些かの迷いも滲ませず、やがて一つの扉の前で止まる。

「ランスターです。入っても宜しいでしょうか？」

彼女の目の前に在るのは、このミッドチルダでは珍しい木製の主導で開ける扉だ。

科学技術が往々に発展した世界の中では、言ってしまうえば古臭い物。それを風情がある、と老将は呵々と笑っていた事を思い出す。

「あー、かまへんよ」

次いで聞こえて来たのは、まだまだ歳若い女性の声だった。

許可が下りた為、彼女はドアノブを捻り、ゆっくりと入室した。入って来た瞬間に視界に入り込むのは禿頭の背の低い老人と嘗て、そして今も上司である女性の二人。

「先日的一件、何か不都合な事が御有りでしたか？」

こうして上官の両名から呼び出された以上、思い当たる節は一つしかない。

先日行われたクラナガン外域にて行われていた魔導師狩り…否、魔力持ちの人間に対する殺傷事件。

それの？処理？をした事についてだろう。

任務外の事とは言え、？元？執務官である以上は見過ごす事は出来ない…と言うか、見過ごす気は無い。

「いや、寧ろ逆じゃよ」

彼女の凜とした声に対する返答は、老将から放たれた。

木杖を使い、ゆっくりと立ち上がるその姿は老人会の…しかし、放つ気配は勇名を馳せた将に相応しいもの。

思わず息を呑む彼女に対し、しわがれた声と口元を小さく綻ばせて続ける。

「お主のした事によつて、見事に残りが釣れての。元より如何にして焙り出すか儂等も案じていたんじや。

有難味こそ有れ、不都合などありはせん」

「局はもう少し放置して、少しでも批判の種を作りたかったみたいやけどね。余計なもんが出る前で良かったわ」

「はあ……」

結局、この二人は何の為に自分を招聘したのだろうか？

思わず疑問が鎌首を擡げ、曖昧な返事を漏らした所で、彼女自身の耳を疑う様な言葉が老将が紡ぐ。

「では、本件を伝えよう。

ティアナ・ランスター。貴様を本日正午を以つて、大隊隊長権

限を委譲し、同時に中佐への昇格を命ずる」

「……………はい？」

「因みに、これは私、八神はやて准将、九頭桐玄道少将、ルーベン・フェルグス少将の三名の推薦からやから拒否権なしやでー」

問答無用で告げられ、退出を促されるティアナ。

それからやや呆然と通路を歩き、やがて自販機でミネラルウォーターを手にし、設置されたベンチへと座って一息。

すうー、はあー。

目を瞬かせる事数回。

もう一度深呼吸。

間が生まれる。

それも静かな。

「……………なんでっ!？」

思わず感情のままに叫んで、通りがかった人を驚かせてしまった。ティアナは頭を下げて平謝りをしながら、先程の意味不明な人事について考える。

嬉しい、や有難い、という感情も無い訳ではない。

何せ、地位を得ると言う事はそれだけ自由を得られる事でもある。これが時空管理局と言う組織であつたのならば真逆——自由が利かなくなるだろうが、此処は違う。

自由が得られれば、それだけ？あの事件？の真相についても入念に調べられる。

しかし、どうして昇進させられたのだろうか、と疑問も残る。

先程、彼女自身が口にした一件は、下手をすれば降格の可能性さえあつたのだ。

「……まあ、良いわ」

其処にどんな企みがあるのか、正直な話ティアナにとっては如何でも良い。

上の立場に行けば、余計な責任も付いて来るが、それを加味しても有り余るほどの益がある。

自分自身の意思で、ティアナは此方側に着いたのだ。

引き留める声さえも振り払い、親友にさえも銃を突き付ける。其処に宿る感情は無視しない。

無視してはならない。

撃ちたくは無い、と。戦いたくは無いと言う自分が居る事を決して偽る事は出来ない。

けれども、それ以上の想いがある。

「……私は、お兄ちゃんが死んだ理由を知らないといけないんだ」

闇に葬られた真実を。

これは、執務官としてでない。ただのエゴだ。

ティアナ・ランスターという、過去を振り切る事が出来ない人間の、身勝手なエゴ。

きつともう、自分が正義を掲げられないと言う事は理解している。どんな理由があれ、この手に武器を持ち、親友とも敵対する道を選んできたのだから。

ダンッ、と力強く、ただ感情の赴くままに激情を机上へと叩き付け、クロノ・ハラオウン提督は奥歯を歯噛みした。

音が聞こえそうな程までに強く、ただ忌々しさと憎々しさ、そして己の不甲斐無さを晴らす様に。

だがそれでも、その感情は消えるどころか、寧ろ増して行く。書簡として通達されたそれは、紛れもない義妹と、彼女が受け持っている少年少女等を戦線へと投入しろと言うものだ。

「…………ふざけるな…………」

唸る様に、ただ一人でいる提督室で男の声が漏れる。

「ふざけるなあつ!!」

今回のクーデターとて、やり方としては褒められたものではないとクロノ自身は思っている。

しかし、管理局が腐敗の極みに達している事は、ある程度の地位にまで上り詰めたからこそ痛感出来ていた。

だから、然るべきやり方で局を変えて行こう、そうした矢先にこの事態で——しまいには妻子を人質に取られた。

従わなければ、身の安全は保証しない、と暗に迫られ、結局は首を縦に振る事しか出来なかった自分が憎らしい。

そして義妹達を、戦争へと関わらせてしまう事になってしまった己の無力さが尚恨めしい。

「……僕は…………無力だ…………っ!」

されど無力に嘆く声とは相反し、その常日頃から穏やかな瞳は轟々と燃えていた。

ただ唯々諾々と従う。

それは局員としては正しいのかもしれない。亡き父は局員として多くの世界の人々を救う為に職務に殉じた。

誇りだ。

クロノ・ハラオウンにとって、紛れもない亡父の存在は誇りなのだ。

しかし、自分は父とは違う、と今此处で彼は理解し、双眸に反攻の大火を燈す。

「全く、最低の人でなしだな、僕は……」

数多の人々の命と、愛する妻子の命を天秤に賭け、選んだのは後者だった。

迷いも無く、ストンと心に落ちて来たこの感情は、己に対する失望と落胆か、或いは安堵なのか。

もしかしたら、妻は自分達の事は気にしないで良いから、と言うかもしれない。

けれども、けれども——クロノ・ハラオウンは、既に心に決めた。

「……少しでも、味方を増やすしかない、か」

この時点で、身内——義妹やその家族、或いは母の関係者達を外している時点で、クロノ・ハラオウンは変わっていた。

その顔は、時空管理局の局員では無く、ただ愛すべき家族を守ろうとしている夫であり、父の顔。

彼の知らぬ所ではあったが、その顔は——亡き、クライド・ハラオウンとソックリだった。

運び出されていく、原型さえ留めていない遺体。

最初の内は、何度も何度も嘔吐していたけれども、もう吐き出す物が何もない。

理不尽に奪われた命の数々。

それを幫助したのは、親友と呼んでいた人とその仲間達。

「……ッ」

ギリッ、とやり場の無い感情が心の中を支配する。

拳を握り締め、フェイト・T・ハラオウンはただ何をする事も出来ずに、移送されていく殉職者達を見送る事しか出来なかった。

「私……何してるんだろ……」

思わず、脱力感と虚無感から眩きが漏れた。

何が『金色の閃光』、何がオーバー・Sランクの魔導師。

仲間の命すら護れず、親友達や嘗ての部下や仲間達の暴挙すら止められず、おめおめと戻って来た。

「フェイトさん……」

「エリオ！？ キャロ！？ な、なんで…どうして此処に！？」

立ち尽くしている彼女に声を掛けたのは、他も出ないエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエの二人だった。

しかし、二人は自然保護区の担当局員であり、このような戦場跡に不釣り合い——否、いてはならない存在。

思わず声を上げるフェイトに対して、その答えを返したのは低く、威圧的な色合いを濃くしながらも説得力を感じさせる声。

「必要だから呼んだのだ、ハラオウン執務官」

「だ、ダールストン提督……」

マッケンジー・ダールストン。

時空管理局本局の提督職に凡そ二十年以上就いている生粋の現場叩き上げの武闘派の局員。

褐色の肌に角刈りの髪型。二メートルは越すであろう長身巨軀。視界に入れるだけで威圧感が滲み出る歴戦の将。

「自然保護区にこそ二人はいるが、管理局の人手不足は此度のクーデターで激減した。戦闘慣れしている局員も少ない。必然的に、実力と経験を積んでいる両名が現場に派遣されるのは自明の理であるう？」

「で、ですけど…二人は！」

「二人は…なんだ？ よもや子供だ、自分の保護児童だの言うのではあるまいな？ 笑わせるなよ。その二人は立派な局員だ。まして、既に子供と言われる年齢は過ぎている。……貴官よりも余程、現状を理解しているしな」

苦々しさ。冷静でいるのなら感じ取れたその色も、今のフェイスには感じ取れない。

ただ、その言葉を皮肉と言う風にしか受け取れない。

「浮足立つな。例えこの戦いに大義は無くとも、私達の背中には護らねばならぬ無辜の民草が居る。彼奴等の思想は、後の為に今の犠牲を已む無しと言っているも道義。それを認めたのならば、数多くの大乱は正当化される」

それだけは、決して認めてはならないのだ。

冷徹な表情で告げられた言葉に、フェイトは顔を俯かせた。わかつているのだ。止めなきゃならない、と。

それでも、頭の中では、あそこに居るのは、敵として立っている

のは、大切な親友や仲間——それに、娘もいる。
その事が、ずっと頭の中から離れない。

「……暫く、頭を冷やしている。今のその顔、今回の作戦で散った局員の遺族の前で曝すなよ」

言外にそれは、フェイトがどんな表情でいるのかと言うのを如実に表している言葉だった。

気遣いを僅かに、だが確かな厳しさと現実を与える為にダールストン提督は態々エリオとキャロを招き、フェイトへと寄せたのだ。

——フェイトは知らない。

ダールストンが、先の作戦で二十年来の部下を失った事を。娘夫婦が今回のクーデター側に回っている事を。

優し過ぎる彼女は知らない。

自らの生い立ち以上に、苦しみを抱えながらも我武者羅に走り続けた者が大勢いるのだと言う事を。

「……私、は……」

ただ、今の彼女は、悔恨の言葉を紡いで立ち尽くすだけ。

既に歳の頃は二十六。少女と呼ばれる時代はとうに過ぎ、今の彼女は大人だ。

しかし、フェイトは優し過ぎるのだ。それは長所であると同時に短所。

今は、彼女の優しさは、その労わりは、誰を癒す事も慰める事も出来ず、虚しい綺麗事として風に消えるだけ。

後に語り継がれるこの戦い。

多くの命を無残に散らし、結果としてクーデター派は矛盾を孕みながらも時空管理局を打ち倒す。

だが其処に正義を掲げる程高潔な者は無く、多くが血に塗れ、また絶望に沈み、世捨て人になった。

管理世界、管理外世界と言う枠組みは消え、またミッドチルダも本来のあるべき姿へと戻った。

時空管理局と言う、肥大化した一防衛組織による一極支配からの脱却及び、政治力の拡大。

少しずつ、少しずつ、人々は変わろうとしていた。

悲しみと怒り、喜びと楽しみ。憎しみと恨み、蔑みと憐れみをその心に宿しながら。

（後書き）

後書き

登場していない人物はいない…はず、ですw

久しぶりに書いたこれも短編です。起こり得るかも知れない一つの結末。

別に管理局アンチという訳でも無い筈ですが、説得力無いですね、崩壊させちゃw

因みに、叢雲の騎士団ことヴォルケンリッターとForce組は普通にいますけど、登場していません。

彼等、彼女等がどの陣営に属しているのか。それは読者の方々のご想像にお任せします（丸投げとも言う）。

また、オリジナルキャラクターも多数登場していますが、短編の一発物なので、殆ど名前と役職だけしか設定してません。

あれですね、名前だけどんどん浮かんで、設定は後からって奴です。

一応下に、主だった面々を書いておきましょうか。クーデター派のみですが。

名前は色々な所からのキャラクターからもじったり、語呂的に良さそうなのと適当だったりしますw

では、また次回の作品でお会いしましょう

クーデター派（管理局を離脱した為階級は飽く迄軍事的側面から見た場合及び、在籍時の最終階級。また、全員ではない）

― 統括元帥 ―

ラルゴ・キール元帥

―大将格―

ブロウン・エピックス大将（元本局）

ガーディ・シャロン大将（元地上本部）

ケーニツヒ・ロイ・ファウン大将

ガルバン・フュリユーダ大将

ギル・グレアム大将（引退した所を最招聘）

ジャマイカン・ハイファン大将

ジョン・エリツク大将

グールドン・コクソン大将

バースディ・ルクセンブルク大将

グリーンマン・ワイルダン大将

―中将格―

カーバニツク・ルツサ中将

ミッドウエー・ジャマイカン中将

バーブル・グロイン中将

ヨハン・イブラヒム・レビル中将

―少将格―

九頭桐 玄道少将

ラービン・フェルグ少将

―准将格―

八神 はやて准将

レイフ・エービル准将

ギラ・マービル准将

―大佐―

クロムエル・シャーミッド大佐

―中佐―

バージット・フレイル中佐

ハ神シグナム中佐

ティアナ・ランスター中佐（元本局執務官）

―少佐―

高町　なのは少佐

オードヴィル・マグナス少佐

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3741t/>

ありえたかもしれない未来

2011年5月19日23時03分発行